鳥取臨床科学 10(1), 34-40, 2018

意思伝達装置の活用による自己表出の支援の実際

足羽翔 [1)]*　圓井和恵 [1)]　山田成功 [2)]
矢島玲子 [1)]　奥田玲子 [3)]
1）国立病院機構鳥取医療センター看護部 5 病棟
2) 国立病院機構松江医療センター看護部
4）鳥取大学医学部保健学科基礎看護学講座

State of support for self-expression utilizing thought transmitting device

Sho Ashiwa[1)]*, Kazue Marui[1)], Naruo Yamada[2)],
Reiko Yajima[1)], Reiko Okuda[3)]
1) The 5th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center
2) Department of Nursing, NHO Matsue Medical Center
3) Department of Fundamental Nursing, School of Health Sciences,
Tottori University Faculty of Medicine
*Correspondence: 鳥取市三津 876 鳥取医療センター5 病棟

要旨

本研究は，意思伝達装置を毎日使用できる環境を整えることによるB氏の自己表出の変化と，それに対する効果的な生活支援について明らかにすることを目的とした.

B 氏は A 病棟入院中の 40 代の脳性麻痺患者で，意思伝達装置のレッツチャットを毎日使用し，打ち込んだ内容を記録紙に残しており，それをもとに, B 氏の自己表出の変化と関わりの実際を，［レッツチャットへの興味を示し始めた時期］，［知っている情報を打てるようになった時期］，［希望･要望が出始めた時期］の 3 つの時期に区分し振り返った．レッツチャットを介した関わりを行った結果, 初めは看護師には読み取れない文字の羅列を打ち込むことが多かったが，少しずつ意味の読み取れる文章を打つことが増えてきた．打ち込んだ内容に対して看護師が返答することで，相互の関係が良くなり，打ち込む内容も増え，要望も打てるようになった.

その結果，B 氏にとって内部活動が伝えられないことがストレスになっていたこと，レッツチャットの活用が相互の人間関係を良好にし，希望や要望が出始めるきっかけとなったことが分かった．また，レッツチャットと併せて，「はい」，「いいえ」のサインを決めて使用することが，自己表出をより促す支援となったこと，看護師に褒められ希望･要望が叶えられることで自己効力感が増し，自己表出を促したことが明らかとなった．鳥取臨床科学 10(1), 34-40, 2018

Abstract

The purpose of this study was to clarify changes in the self-expression of Person B resulting from making daily use of a thought transmitter device possible and effective lifestyle support for such a patient. Person B was a cerebral palsy male patient in his 40s who was hospitalized at Ward A. He used the “Let’s Chat” thought transmitting device daily and the records of details he recorded were stored. Based on these records, changes in

Person B's self-expression and the state of communication were divided into three time periods for review. These were when he started becoming interested in Let's Chat, when he started entering information that he was aware of and when he started expressing hopes and demands. Communication mediating Let's Chat first resulted in many instances of simply entering long lists of information that the nurses could not read. He then gradually started to enter more meaningful sentences. When nurses responded to the information input by the patient, this improved their mutual relationship, resulting in an increase in the amount of information that he input. He also started to input demands.

This communication revealed that Person B felt stress as a result of not being told about internal activities, that the utilization of Let's Chat had improved mutual human relationships, and that this had then enabled him to start expressing hopes and demands. In addition to Let's Chat, determining signs to indicate "Yes" or "No" also helped to further facilitate self-expression. Being praised by nurses and having his hopes and requests granted increased his sense of self-efficacy, further encouraging self-expression. Tottori J. Clin. Res. 10(1), 34-40, 2018

Key words: 意思伝達装置, 自己表出, 障害者の生活支援, 重症心身障害児（者）, 自己効力感; thought transmitter device, self-expression, lifestyle support for people with disabilities, children (persons) with severe motor and intellectual disabilities, sense of self-efficacy

はじめに

障害児（者）医療では, 生命･生活の質を考慮し, その人らしい人生を歩めるような支援が求められている. しかし, 重症心身障害児（者）は精神発達遅滞や運動障害により, コミュニケーション障害を伴うことが多く, 支援が難しい.

八代ら [1] は, 音声表出が困難な人たちの支援として, 「ことばや音声に代わって意思を伝えられるようにする支援が必要となる」と述べている.

最近, 意思伝達装置が筋萎縮性側索硬化症の患者を中心に活用されている. しかし, 重症心身障害児（者）を対象とした先行研究は少ない. A 病棟に入院中の脳性麻痺患者 B 氏は, 以前, パソコンソフトの意思伝達装置を使用していたが, パソコンの故障により使用できなくなっていた. 昨年度, B 氏の同室患者がパソコンを使用するようになり, B 氏はそれを見て羨ましそうに見つめていたことがあった. そこで, 週 1 回の頻度で, 作業療法士（OT）により, 意思伝達装置の 1 つであるレッツチャットの使用を開始した. B 氏はレッツチャットの使用方法を理解すると, 看護師や OT の予測以上に文字が打てることが分かった. そこで今回, 意思伝達装置が毎日使用できる環境を整えることによる B 氏の自己表出の変化と, それに対する効果的な支援について明らかにしたいと考えた.

用語の定義

自己表出: 表情や全ての動作･活動により, 自己の要求や感情を表出すること.

内部活動: 言語理解はある, もしくは言語理解が出来ないとは言えない重症心身障害児（者）が, 言語での表出が出来ない代わりに, 非言語性のコミュニケーション法でコミュニケーションを成り立たせようとする思いを言う.

I. 研究方法

1. 事例研究

2. 事例紹介

B 氏. 40 歳代, 男性.

主病名: 脳性麻痺, 精神発達遅滞.

発達年齢: 遠城寺式乳幼児分析的発達検査で, 対人関係は約 1 歳, 言語理解は約 3 歳. 大島分類は 16.

コミュニケーション: 以前は「はい」の時には口を開け, 「いいえ」の時には首を横に振